● 日本語・日本語教育を研究する ●

第17回

会話能力の測定

京都外国語大学教授　鎌田　修

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマは会話能力の測定です。

1. 日本語が話せるということ

日本語が話せるということはどういうことでしょうか。日本語の発音ができる、日本語の単語を知っている、日本語の文法を知っている等々、色々な条件をあげることができますが、しかし、それで本当に十分なのでしょうか。今でも世界中の多くの外国語教育の場で行われているダイアローグの丸暗記などは、はたして、その言語の会話能力があるということを保証するものなのでしょうか。ただ話せればいいというのであれば、訓練を積んだオウムや九官鳥にもできることになります。

会話は話し手と聞き手相互のインタラクションからなり、決して一方通行の言語行為ではありません。また、そのインタラクションは何らかの目的（タスク）を果たすために実行されるのであり、無目的に行われるのではないということも事実です。つまり、私たちの生活は言語を媒介とした様々な言語活動(言語生活)から成り立っていて、それを満たすために言葉を発するのだと考えられます。したがって、日本語ができるということは日本語を媒介とした言語活動が遂行できる能力であり、その口頭面の能力を日本語の会話能力と定義づけることができるでしょう。

コミュニケーション能力（communicative competence）という用語が使われるようになって30年近く経ち、その意味するところもずいぶんはっきりしてきたと思います。Canale & Swain（1980等）のモデルに従うと、それは①文法能力（grammatical competence）、②社会言語学的能力（sociolinguistic competence）、③談話能力（discourse competence）、④方略能力（strategic competence）からなるということですが、上に述べた口頭面における「言語生活遂行能力」という会話能力観はこのモデルを具体化しただけでなく、さらにそれを包括的に捉えたものです。なぜなら、どのような言語もその言語文化に対するしっかりした認識なしには適切な使用は難しいからです。

2. 会話能力の測定：OPIの場合

私が日本語を教え始めた70年代中ごろは、会話テストとして、まだ、ダイアローグの暗誦を課したり学習した語彙や文型が使えるかどうかを調べるのが一般的でした。何かの絵（例、部屋の構造）を記述させるタスク形式のものもありはしましたが、先に述べたような包括的な会話能力観に立ったテストはまだ生まれていませんでした。このような状況は今でも変わらず、日本語能力検定試験においても会話能力の測定はいまだ開発中の段階で実現はされていません。

こういう現状の中、ここで、私が紹介をする会話能力測定は米国外国語教育協会（ACTFL）が開発し、実用化されているＯＰＩという面接による会話能力テストです。ＯはOral（口頭）、ＰはProficiency（外国語熟達度）、ＩはInterview（面接）、つまり、面接方式による外国語の熟達度測定です。このテストには前に述べたような包括的な言語能力観に基づき、また、汎言語的に通用するとされる外国語能力規定（以下「ガイドライン」）があり、それを基に被験者の能力（熟達度）判定を行います。

このガイドラインは初級～超級の４段階の能力尺度からなり（上の能力は下の能力を含むという考えから）超級→初級の順で述べると次のように説明できます。

超級（Superior）：意見の裏付けができ、仮説が立てられる。具体的な話題も抽象的な話題も議論できる。言語的に不慣れな状況にも対応できる。（例；無実の表明、環境政策批判、幼児の説得、専門的テーマの講義）

上級（Advanced）：主な時制／アスペクトを使って叙述、描写できる。複雑な状況に対応できる。（例；故郷紹介、交通事故の報告・処理、病状説明、隣人への苦情、値切り）

中級（Intermediate）：自分なりに言語が使え、よく知っている話題について簡単な質問や答えができる。単純な状況や、やりとりに対処できる。（例；買い物、道案内、ホテルの予約、デートの約束、スケジュールを立てる）

初級（Novice）：決まり文句、暗記した語句、単語の羅列、簡単な熟語でのみコミュニケーションができる。（例；挨拶、名前・時間・値段・年齢などを言う）

ここで注意を要するのは、ここでいう「初級～超級」とは、一般の教育機関、教科書などで使用されているそれらの用語とは全く関係がないことです。ここに見る能

力判定は「X教科書でY時間学習したから○○級だ」というのではなく、どういう言語活動が遂行できるかという、言語の機能面に焦点を当てているのです。もちろん、語彙、文法などを知らずして言語活動の遂行はできませんが、文法能力は外国語能力の一部にすぎないという認識です。というより、このガイドラインではコミュニケーション能力がそうであるように、社会言語学的能力などの運用能力を文法能力と同等に扱います。つまり、①どのような言語活動（機能・タスク）を、②どのような場面（コンテクスト）で、③どのように（正確さ）、そして、④どのような談話の型として遂行できるのかということを問題にしています。これをガイドラインの**４大構成要素**と言います。それらを簡単に説明すると次のようになります。

①**機能・タスク遂行能力：**機能とは言語活動そのものの目的、例えば、要求、感謝、記述、説得等抽象的な概念で、それを具体化したもの（休暇の請求等）がタスク。固定化、習慣化したストレートな機能・タスクほど遂行しやすく、予期できない出来事等、よじれを伴うものほど難しくなる。

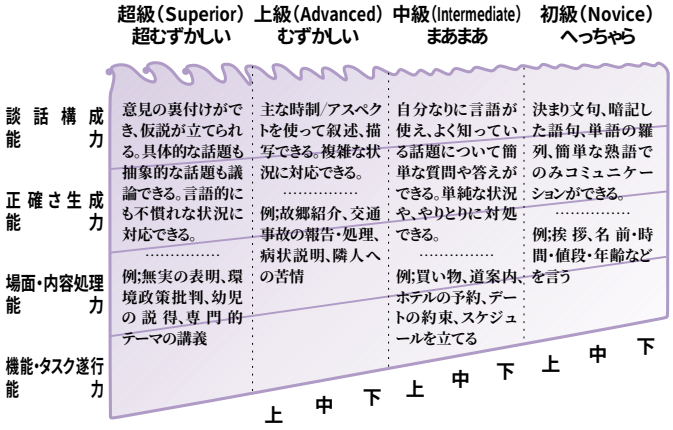
②**場面・内容処理能力：**言語活動の場面と話題そのもの。話者自身を軸とし、見知らぬ人、目上の人に話すなど、心理的、社会的距離が広がれば広がるほど処理が難しくなる。

③**正確さ生成能力：**文法、語彙、発音、社会言語的能力、語用論的能力、流暢さの要素からなる。話者自身にしか通じない正確さから、目標言語を母語とする人に問題なく通じるレベルまでを想定。

④**談話構成能力：**単語から複段落にいたるまでの明確な伝達機能を持った言語の単位。言語活動の表面的な言語形式。

上に述べたことは、次のように図示することができます。

図１　「言語活動のプールとその構成」



この図は外国語能力と水泳の能力とを比喩的に示したものですが、能力があればあるほど、遠く、広く、また、深く話せる（泳げる）ということを意味します。

3．会話能力の判定

ＯＰＩは最大30分という限られた時間内に被験者とできるだけ自然な会話を行い、その間に被験者がどのレベルの言語活動をどのレベルの表現で、どれほど遂行できるかを調べます。図１を利用すると、まず、被験者にそもそも対話ができるのかどうか（中級レベルに入れるかどうか）を調べ、その能力があると分かれば、さらにどの辺りまで行けるかという**上限探し**を行います。その過程において無理が生じ、例えば、人物説明などがうまくできず、言語的挫折を起すと分かれば、もう一度、無理のないレベル**（下限探し）**に戻します。このような上限探しと下限探しをいろいろなタスクに対して繰り返し、もっとも安定したレベルを探し出します。大抵の場合、仮測定が終わってその段階でロールプレイを行います。その目的は、面接の場にできるだけ実際の言語活動場面を持ち込み、例えば、デパートなどを想定し本当に買い物ができるのかということを確かめます。そして、締めくくります。この作業は次のように図示できます。

図２　ＯＰＩの形式：
ウォームアップ　→　下限探し　←（繰り返す）→
上限探し　→　ロールプレイ　→　ワインドダウン

面接はテープレコーダに録音し、テストの後もう一度聞き直し、ガイドラインに照らし合わせて能力レベルの決定を行います。初級、中級レベルの話者には15分位、上級、超級話者には25分から30分かかるのが普通です。水泳力を調べる場合も同じで、上級のスイマーに初級レベルの課題を与えても意味がありません。また、本当のプールで調べるのではなく、畳の上で泳げるかどうか調べるのも無意味です。ＯＰＩも、被験者の大体の能力レベルをできるだけ早く見つけ出し、それを絞り込んで最終的な判定を出す必要があります。詳しくは私の行ったインタビュービデオ（『日本語教授法ワークショップビデオ』）を見て下さい。ＯＰＩは日本語教育に大いに応用できる面を持っていますが、それについてここで述べることはできませんので、それも参考文献をご覧になって下さい。

基本的な参考文献

鎌田修・川口義一・鈴木睦（2000）『日本語教授法ワークショップ増補版』凡人社（1996にビデオあり）
牧野成一、鎌田修他（2001）『ACTFL－OPI入門』アルク
Canale, M. and Swain, M.（1980）" Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing," Applied Linguistics　１：１－47.
Omaggio－Hadley, A.2001.Teaching Language in Context.（3rd ed.）　Boston: Heinle & Heinle.
Swender, E. ed.（1999）ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual, Hastings－on－Hudson, NY : ACTFL.